

## 今は昔

江川メンタルクリニック 江川 功

時の移り変わりは早いもので、いつの間にか古希といわれる年齢になり時間を惜しむ世代となってしまうた。医師会からの依頼もあり、これまでのこと、特に若かった頃を振り返ってみたい。それではタイムトラベルを始めよう。

タイムマシンの日付を昭和45年3月18日に合わせた。漆黒の闇の中をひたすら下へ下と下っていくと、明るい陽射しの中、中の島の阪大本部に入試の合格発表を見に行っている自分がいた。もうすぐ本部というところでこちらに向かって高校の同級生が歩いてくるのに出会った。「試験落ちてもた」と赤い顔をして私に話すとスタスタと行き過ぎてしまった。それまではおそらく入試は合格していると思っていたが、やはり多少の不安もあり、急に足早に本部まで歩いていった。あった。受験番号6041を見つけてほっとした瞬間ぼやけて見えなくなった。眼をこすつてもう一度番号を確認したが、京大は受験番号とともに名前も掲載されているのだが、阪大は番号だけなので少し不安を伴う。昭和45年は、大阪万博の年であり、高度成長華やかになりし時で、日本そのものも青年時代であったといえる。フオーク世代で、ギターを中心にみんなで歌ったりして学生時

代を謳歌したものであった。物価も安く、大学の授業料も高校での授業料とほとんど変わらない時代であった。タイムマシンの日付をこんどは昭和47年3月に合わせた。漆黒の闇の中を今度は上へ上へと昇っていくと、春の陽射しがまぶしい阪大石橋キャンパスに出てきた。この時政府は国立大学の授業料を3倍（1000円から3000円）に上げるという案を出したが、まだ70年安保の名残を残した時代で革マル派などの活動家が先導し反対運動を起こし後期試験をボイコットした（私自身は早く教養を済ませて基礎に行きたかったので、何もボイコットはしたくなかったが）。私も同級生と一緒にバリケードで入れなくなった教室をながめていた。結局半年遅れで教養の後期試験を済ませ基礎に9月から行くことができたが、半年遅れなので卒業が遅れるなどのデマがあったが、とにかく無事に卒業ができた。ストライキのおかげでとにかく授業料はこの時は上がりずすんだので、2年後輩達には感謝してもらいたい。過去の自分と一体化した私はこの頃に病気で亡くなった父を見送り、父の入院を引き受けていただき、励ましの言葉を投げかけてくれた阪大高次研究生化学教室の佐野勇教授に最大の感謝をささげるとともに、その時お世話になった多くの方々には今でも感謝の念にたえない。とりわけ私の阪大医学部入学を心から喜んでいただいた上、経済的援助もして頂いた父の上司のK氏、脳波の取り方や見方を教えてもらった大阪大学の中検脳波室のN氏

(子供の頃近くに住んでいたので母が知り合いでその関係)には感謝の念でいっぱいである。脳波の勉強により、卒業長い間勤務(29年)した大阪回生病院や、現在の診療所の前の院長である、山本順治先生ともご縁ができたその後の精神科医としての人生に大きな影響を与えてもらった。次に昭和52年4月1日に時間を合わせて、大阪回生病院の4階病棟に移動した。新しい病院での就職初日ということでも少し緊張気味ではあったが、まだ若々しい自分がいた。大学で1年研修し、この年大阪回生病院に就職したが、当時の大阪回生病院精神科は神経病理の大家の山下実六先生や徳島大学の元教授の今泉恭二郎先生がおられ、就職後は大学研修医と変わらない感じで薫陶を受け(少し窮屈ではあったが)精神科医としての基礎を教わった。また勤務して2ヶ月位は両大家の診察についていわゆるシュライバーをした。山下先生は診察が極めて遅く始まるので間が持たず、今泉先生は早く来られて外来を始められるので間に合うように早く出勤するなど中々辛い点もあった。今泉先生から今の大学ではドイツ語での教育はあまりなされていないので、山下、今泉両大家のカルテを読んだり、教育を受けるにしてももう少しドイツ語を勉強する必要があるとのこと、最初の年からドイツ語の論文(医学ではなく自然科学的なもの)をドイツ語の勉強のために訳すという時間を週1回とってもらった。最初の1年は大学の同期と一緒に勤めだったので2人で論文を交代で訳

し、今泉先生に見てもらおうという感じであったが、翌年同期の杉本君(その後阪大の基礎で教授になった)が基礎の大学院に行くとのことでやめたため、その後今泉先生が退職されるまでの3年間はマンツーマンでの指導となり、大変であったが、博士号取得のための語学試験(英語と独語)は簡単にクリアできたのはまさにこのおかげであり、感謝している。また大阪回生病院の精神科は九大のジッツであり、今泉先生が病気でしばらく休まれることとなった時、九大精神科から多くの先生方が外来の手伝いに来てくださった。その中には後の宮崎医大の名誉教授で三山病の発見者でもある三山吉夫先生(当時九大精神科の講師)もおられ、若い先生の考えていることを聞きたいと言われ、色々な話をする機会もあった。また昭和55年に今泉先生が定年で退職され、外来が手薄となったので、小生と同年代の若い先生方が1〜3年位の長さで医局員として来られ勉強や遊びをとともにできたのも貴重な体験であった。九州の先生方はあまり人に影響されないのか、在職中も博多弁を使いその関係で私自身が会話中に「何何じゃけん」という言葉ができてしまいおかしい感じであった。当時の大阪回生病院の医局は色々な大学から来られた先生がおり特に阪大系というわけでもなく、九大、神戸大、鳥取大、大阪市大等の大学出身者がおり、極めて開放的で自由な雰囲気があった。当時の医局は正に昭和なおいが濃厚であり今のような多少無機質な感じはなかつ

た。医局には多くの医局員が5時少し前から集まり、雑談をしたり、遊んだりしていた。当時はおそらくどの病院もそうであったと思われるが、医局の一部には麻雀台があり、多くの先生が興じていた。碁盤や碁石、将棋盤や駒も何セットか置いてあり、大概どの道具も誰かが使用していた。私自身もあの病院に行っただおかげで8〜9級位であった、囲碁の実力が病院を辞めるころには3段の免状をもらうようになった。プロの先生（日本棋院関西総本部早瀬弘9段）に来ていただいて教えてもらったことも大きかったが、囲碁のライバルであった小児科のK先生とは名勝負（迷勝負）を繰り返し、長考のやりあいで、1局が終わるのに2時間位かかった。麻雀をしながら対局をのぞいていた高段者の先生からは何をいつまで考えているかとチャカされながら長考していたことで強くなった面もあり夕方方が楽しみであった。そういった努力のいかいもありしっかりと上達したのもあるが、病院を異動するとともにほとんど囲碁とは無縁となってしまった。医局で毎日のように市が立つことは当時の我々のような医者に成りたての青二才にはありがたいことで、当直（当時は精神科もまだ病院全体の当直をさせられていた）でわからないことがある時には麻雀中の先生に聞いたら結構丁寧に教えてくれたり、どうしようもない時には手伝ってくれたりしてありがたかった。ただ今と違い院内禁煙なんてことはなく、医局でも煙草の煙がモクモクとしていたのはかなわなかつ

た。しかし全体としては平和でのんびりしたよい時代であった。また臨床研究に関しては今では倫理委員会に出して承認を得られなければ、何もできない状態だが、当時は脳波検査でも高次神経機能による反射でんかんを調べるために、計算や書字などの作業をしながら脳波をとったりしていたが、それこそ病院に迷惑をかけながらやっているという感じであったが、当時はそれが当たり前で何もおかしなことをしているという感じもなかった。またせん妄患者が見つかる、阪大の睡眠研究室関係の先生に手伝ってもらい、終夜脳波検査をしていた。病院にとつてのメリットは論文になった時に病院の名前が所属として出るぐらいで、経営的には足を引っ張っていたのに何のお咎めもなかったのは、おそらく他の科の先生も同じようなことはしていたと思うが病院に礼を言わねばならない。また脳波は精神科に属していなければいけないという山下先生の卓見で、4階の精神科病棟内に脳波室があったのもありがたかったし、検査技師のYさんも精神科に所属していたので、私の多少無理な要求も聞き入れていただき検査に協力してもらった。病院経営もおおらかであったと思われるのはこのような研究面だけでなく、文化活動（当時は多くのクラブがあり、囲碁部、茶華道部、刺繍、テニス等に終業後いそしんでいた）や、病院全体での慰労と職員との交流を深める目的で院内旅行なども行われ楽しく参加させてもらった。

過去の楽しい（つらいこともあったが）時を過ごし、昭和60年になった。8月には日航機の御巣鷹山での墜落事故があり、多くの方が亡くなった。その事故から丁度2週間ほど後にロンドンで国際睡眠学会があり、初めての国際学会への参加で気分は高揚していたが、事故があったため、フライトでの不安が出てきたが何とか無事にロンドンまで行け、また阪大の睡眠研究室の先生方とは学会後スペイン旅行を楽しんだ。学会から帰ってくる色々な雑用も残っていたが、問題はどうかやらタイムマシンの動力が切れかかってきていたことである。このままずっと過去の自分と一体化しこの世界に滞在し続けるのか、やはりもとの世界に戻るのか、昔の甘い懐かしい生活も捨てがたかったが、ここではあくまで自分は影であり、実態がないので元の世界に戻ることとし、タイムマシンに乗り込んだ。さすがに今度は長い航行であるが、余裕も少し出てきて、闇のなかに、過ぎ去っていく平成の世の中を見ることができた。闇を出て明るい世界に降り立った。幸いなことにそこは我が家の近くであった。どうやら動力はギリギリもつたらしく、令和の世の中のようにであった。降り立って我が家に入ったと思った時に、大きな声をかけられ、気が付くと自分の部屋の中で寝ていたらしい。今日は妻と出かける約束をしていたのを思い出した。邯鄲の一炊の夢同様になぜかの時間の間に甘く懐かしい夢を見たことに感動したが、現実はいつもと同じやや退屈な1日がまた始まった。

思いつくまま昔のことを勝手に書かせていただき医師会諸先生には感謝している。

後書き…いろいろと構想を考え夢のような話をした。構成は夢物語であるが、内容は事実を書かしてもらった。一般的に時間航行をするときには過去ならば自分が存在している、自分がまだ存在していない過去に移動すべきであるが、自分の過去を思いだすにはやはり自分の生きた時代に戻るしかない。このような時間旅行が理論的にできるかどうかはまったくわからないが、阪大医学部の大先輩である、手塚治虫氏が鉄腕アトムで描いた夢のようなもの、自力で動き考えるロボット、空飛ぶ車、宇宙旅行等も現実になつてきており、タイムマシンはひよつとしたら実現するかなと思わせる時代がいずれ来るかもしれない。ただ我々世代は見ることはないであろうが。